

# 不登校に関する一考察

## ～自閉スペクトラム症児の個別の事例検討を通して～

大塚梨央

(広島国際大学大学院心理科学研究科実践臨床心理学専攻)

### 序論

小中学生の不登校の増加は近年大きな問題となっている。2016年度には、小学生では31151人、中学生では103247人が不登校を経験している(文部科学省, 2017)。不登校の原因は一つではなく、個人要因、学校要因、家庭環境がある(市川, 2014)。

そうした不登校の問題を抱えた小中学生の中で、特に発達障がいをもつ子どもたちは周囲の無理解から、他者と触れ合う学校でのトラブルを起こしやすい。発達障がい児の不登校に関する研究はこれまでもなされているが、発達障がいと言っても、障がいの種別や程度、障がい児を抱えた家族という家庭環境等での個人差が大きいため、発達障がい児の不登校を考える場合には、その障がいの違いや生育歴といった個人の事例を分析することが重要になってくる。

一方、小中学生の発達障がいの中でも自閉スペクトラム症は障がいの重さも様々であり、通常の学級に通う障がい児も多いことから、不登校を経験する機会が多くなっていると考えられる。自閉スペクトラム症の主症状であるコミュニケーションの障がいや興味と行動の偏りは、集団活動や画一的な行動規範を求められがちな日本の学級内での対人問題を起こしがちで、学校環境への適応を困難にすることで、不登校に結びつきやすい障がいだと考えられる。そこで、本研究は不登校の問題を抱える小中学生の中でも特に自閉スペクトラム症をもった子どもに焦点を当て、彼らの個別の事例検討を通して、不登校から再登校への過程を質的分析を用いて検討する。

### 方法

・研究対象児とその保護者：A大学の自閉スペクトラム症を対象とする療育活動に参加している母親6名に回答してもらった。複数同胞事例のある家庭は人数分回答してもらい、全8名の子どもデータを得た。

・質問項目：(1)不登校期間、(2)不登校要因、(3)不登校に対する学校の対応、(4)不登校期間の過ごし方、(5)再登校のきっかけ、(6)効果的な支援について自由記述の質問紙調査を行った。

・手続き：毎週土曜日にA大学で行っている自閉スペクトラム症児を対象とする療育活動の時間内に保護者に質問紙を配布し、回答してもらった。

・分析方法：複数径路・等至モデル(Trajectory Equifinality Model; 以下TEM)を援用した。

### 結果と考察

不登校から再登校への時系列変化について、TEMによる分析結果を図1に示した。

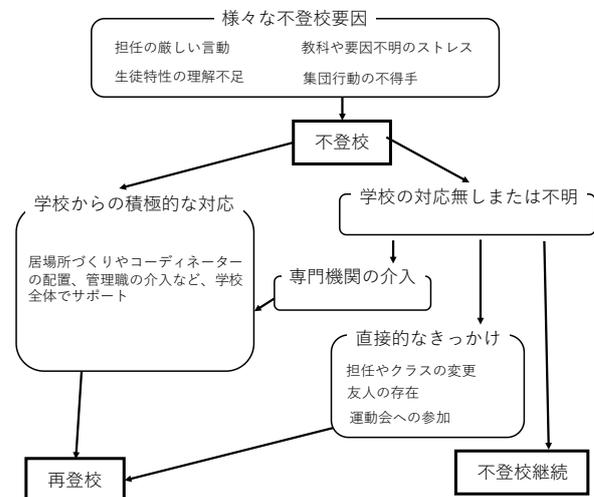


図1：TEMによる不登校から再登校への過程

今回の研究から、再登校には学校からの働きかけの有無が重要であること、クラス替えや学校行事開催などの偶然的な要因も、再登校に至る直接的なきっかけになるケースがあることがわかった。自閉スペクトラム症児の不登校は、学校からの積極的な対応によって減らすことができる可能性がある。

不登校は子どもと学校との文化摩擦(山本, 2005)だとすれば、「異文化コミュニケーション」が可能となるような環境づくりとして、まず家族と学校とが子どもの特性に応じた支援方針について、積極的に情報共有していくことが、子どもの不登校を長期化させない上で重要であろう。

### 引用文献

市川(2014) 白梅学園大学・短期大学紀要, 50, 81-97. / 山本(2005) 岡山大学教育実践総合センター紀要, 5, 131-137.